ニューキャッスル大学での短期留学を終えて

医学部医学科５回生　K.S(Male)

私は 2014 年 3 月の 4 週間、医学教育振興財団の短期留学プログラムを通して、ニューキャッスル大学の附属病院で臨床実習を行う機会を頂きました。今回の留学に関して、以下に報告させていただきます。

【経緯】
過去に海外で学んだ経験から、専門を学んでから留学したいと思っていました。また、自分の英語力、医学の力でどれだけ出来るか試してみたいという気持ちもありました。
留学先に関しては、出来るだけ現地の医療に参加したいと思い英語圏での留学先を探していた時に、医学教育振興財団の英国短期留学プログラム
(http://www.jmef.or.jp/index_main.html)について知り、イギリスへの留学を決めました。

【実習内容】
ニューキャッスル大学は実習する科を自由に選択することができ､私は一般外科を１週間、呼吸器内科を１週間、感染症内科を２週間回りました。
私も現地の学生と一緒に回り、問診や身体診察などを現地の学生と同じ様に経験することができました。例えば病棟の回診では、学生が診察を取って所見を上の先生に伝え、上の先生がもう一回診察して学生にフィードバックをするという流れでした。この方法は、自分の診察が正しいのか、正しくはどんな所見が取れるのかをその場で学べるという点で学ぶことが多かったです。また、assessment suite と言って、救急の患者や GP（家庭医）から紹介された患者の振り分けや、それ程緊急度の高くない患者の初期対応を行う病棟でも実習をする機会がありました。そこでは患者さんの初期対応を学生が任されていたため、主訴や現病歴・既往歴など必要事項の問診を１人で行い、それを先生に短くプレゼンすることが求められました。普段日本での実習で初期対応をすることは無かったので最初は緊張しましたが、任されている責任感もあり楽しく充実した実習でした。このように、学生の立場ながら、自分で希望すれば日本にいる時以上に医療に参加できるという点は、言語のバリアが無い英語圏ならではだと思います。
実習中に感じたのは、現地の学生の臨床能力の高さです。一緒に実習をしていると、彼らはまず患者さんとの関係を構築するのがとても上手く、さらに問診も身体診察も手馴れたものでした。問診では私が先に聞いて、彼らに後からフォローしてもらったりと助けてもらうことも多かったです。理由はいくつかあると思いますが、１番大きいと感じたのは彼らの積極性です。特に最終学年である５年生は医療者側の一員として動いているといった印象で、積極的な一部の学生だけではなく多くの学生がそれを当たり前ととらえていたように感じました。自分の担当患者だけでなく病棟の患者の状態チェック、カルテ記入、看護師さんとの情報交換など、日本では医師が行うようなことを自然にこなしていることは驚きでした。

【留学を終えて】
留学において必要だと感じたのは、やはり積極性、そして医学の知識です。上にも書いた通り、学生が出来ると言えば何でもやらせてくれる環境なので、まずやってみるという積極的な姿勢があれば多くの経験ができると思います。また、もちろん英語が上手であるのに越したことはありませんが、あくまで医学は医学なので、日本で学んだ医学の知識がもっとしっかりしていたらと感じることがあり、普段の実習や勉強に対する姿勢を見直すきっかけとなりました。
ただ、このプログラムの参加者の多くは IELTS 7.0 以上で、選考では英語が重視されるため、なるべく早めから IELTS を受けると良いと思います。（提携校も同様だと思います）

最後になりましたが、この留学に際しては教育センターの和佐先生に本当にお世話になり、また、岸本国際交流奨学金の援助を頂きました。貴重な機会を与えて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。これからも多くの学生が海外実習に参加し、素晴らしい経験が得られることを願っています。